

官に頼らず官を支える ～東日本大震災にJCIの存在意義を知る～

2011年度は日本国にとって、歴史的分岐点となる年となりました。それは東日本大震災という大規模災害が発生した事に起因する、あらゆるカテゴリーの社会的構造に複合的に影響を及ぼした事によって起きた強制的パラダイムシフトです。JCI大阪もまた、その渦中にある民間の団体として大きな役割を担ってきました。これは、JCIという団体の存在意義を改めて浮きだたせ、被災地域で最も機敏で早く効果的に動ける民間団体として広く認知度を高める事になった事で、改めて自らの存在意義を知る機会でもありました。被災地域では、家も仕事も失った現地メンバーが着の身着のまま、物資の受発送を担い活動をしていました。私たちはそういった現地で踏ん張っているメンバーをハブに、どの団体よりも迅速に血液を循環させる能力を持っている事に気がきました。この事実は、これから先の社会を連想させる象徴的出来事でもありました。高齢化社会を迎えている状況で、国策による社会インフラの整備が臨界点に達しつつある現在、民間の経済活動を通じて社会を支える事が民間の役割です。企業やNPO、NGOや各種法人はこれまでに国が担ってきた役割を経済活動で補完して行かなければなりませんし、私たちの役割として、例えば3.11後に目まぐるしく変化するエネルギー市場についても民間企業の理念ある方向性を調査しながら創り上げていくエネルギーの問題や、先の選挙でも実施したインターネット上での政策比較を行うweb討論会という事業等を継続しなくてはなりませんし、自らがactive citizenであり続けなくてはなりません。そして、本年度の活動を通じて考えられる、これからの社会で企業や団体として社会を創っていくのは「共感経済」を具現化出来る団体であると思います。その為には、企業や団体活動の中には理念を具現化した活動を告知しなくてはなりません。例えば、JCであってもアニュアルにISO26000やグローバルコンパクトといったCSR的指標を用いたレポートやより客観的な評価も必要でしょう。そのことがまた、JC活動自体の存在意義、働く意義、社会との結びつきを、所属している個人の啓発を通じて社会に共感を生み、魂のこもった社会を作ります。そんな社会を支えていくのは「国に頼らず国を支える」という事を具現化出来る我々事業家であるメンバー各々との自負を持ってそれぞれのフィールドで活躍できるメンバーでありたいと思います。市長も変わり、さらなる歴史の転換期を迎えたJCI大阪の次年度以降の活動においても、先輩諸兄より受け継いだ「官に頼らず官を支える」伝統を守り続ける事を祈念して、アニュアルに寄せての寄稿とさせていただきます。

直前理事長
近藤 康之

Yasuyuki Kondo

世界が共に行動する事の大切さを実感 ～日本JC・UN議長としての活動を通して～

本年度は、2008年に起こったリーマンショックから徐々に経済が立ち直りつつある中、3月に発生した東日本大震災の影響により、日本の経済活動が停滞し、一時は当初考えていた運動を続けていく事が危ぶまれましたが、皆様のご協力のお陰で復興支援活動にも取り組みながら、大阪青年会議所の運動・活動を続けていく事ができました。

2011年度は、社団法人 大阪青年会議所の代表として『明るい豊かな社会』を実現するために、公益社団法人日本青年会議所に顧問として出向させて頂きました。大阪JCや日本JCの活動を通じて今までに培った知識や経験をもとに、物事に正面から取り組むこと等を、メンバーの皆様にお伝えし理解して頂くべく行動をしておりました。

また、本年はJCI（国際青年会議所）の、UN AFFAIRS COMMISSION CHAIRPERSON（UN議長）としても出向させて頂きました。同じJCIバッジを持つ多くの海外のリーダーの方々と意見を交換し、さまざまなリーダーシップの取り方に触れる機会を頂きました。グローバル・パートナーシップ・サミット（GPS）においては、国連ミレニアム開発目標（MDGS）の達成をめざす国際連合（ユナイテッド・ネーションズ）に賛同し、どのようにしてJCIナッシング・パットネット・キャンペーン（MDG6：マラリア撲滅運動）を成功に導くのか、またグローバル・コンパクトに対しどのように参画すれば良いのかといった議論を熱く交わすことから、世界中が目的に向かって共に行動をする事の大事さ改めて実感いたしました。

青年会議所というのは、多くの事を学ぶ場であり、高みを望み、挑戦していく団体であると思います。そして、挑戦をしていく事が、多くのリーダーを育て、まちの活性化につながっていくのだと考えます。その中において多くの事を学ぶためにも、リーダーは、志を同じくする仲間と多くの事に挑戦し、失敗しても起き上がり、這い上がる必要があると考えます。

リーダーを掘り起こすためには、メンバー一人ひとりが物事に携わることができ、自分たちの行っていることが市民の皆様に伝わっていることや、社会貢献をしている認識ができればならないと考えます。その上で、メンバー一人ひとりが、ただ単に“やらされている感”から、自らが進んで発言し前へ前へ行動していくような人が生まれる運動を展開していく必要があると思います。私たち青年が高い志を立て自分自身が変わらなければ、決して未来は変えることができません。

最後になりますが、大阪青年会議所は、昨年度にJCI世界会議を開催という大きな目標を達成し、そして本年度は次の大きな目標を確立するために多くの事に理事会構成メンバーで挑戦しました。残られるメンバーの皆様は、脈々と続けてこられた青年会議所運動とは何なのかを考え、未来を見据えて高い志を立てて行動していくことを切に願います。

本年度も大阪青年会議所に対し、多方面の方々にご理解、ご厚情を賜り、誠にありがとうございました。今後とも引き続きご支援のほど、どうぞよろしくお願い申し上げます。

特別顧問
藤井 俊成

Toshinari Fujii